

## 歯医者

今、歯医者にかかっている。虫歯であるが、まあ歯医者好きな人はいないだろう。で、この歯医者にかかるとのが苦痛なのである。なぜなら「笑いをこらえる」のが辛いからである。

まだ卒業するかどうかの頃、留年を繰り返して、ボクらと同期になったか、ひとつ下だったかもしれない。名前は忘れたが、いろんなエピソードを残した男がいた。

あるとき、虫歯の処置に麻酔薬を打つ。「先生、この注射、なんぼでもはいますよ！」アホッ！突き抜けとんのんじゃ！（注射は思い切りよく刺した方が痛くないが、思い切りがよ過ぎて突き抜けたら、つまり貫通してしまったら、麻酔も注射も意味がなくなる。）

指導教官が、〇〇したか？と尋ねると、沈黙を保つ。要するに〇〇の意味がわかっていないのである。……つまり、当時のわれわれとチョボチョボのレベル。

別の人らしいが、痛かったら右手を上げて合図をしてください、と言う。……ボクの経験したのは、ハイ、ハイ！というだけで、少しも止めてくれなかった。またレベルの低い連中の話になるが、この合図をしているのにまったく気付かず、患者が気絶したというもの。そこまで目が行き届かない、つまり余裕がないから、せっかくの合図が無意味になってしまった。

もうひとつ、嫌いなものがある。散髪屋（床屋）である。昔から、ジッとしていなければならぬから、散髪は嫌いだった。このあとの話は、実話ではないだろうが、40年も50年も前の笑い話である。散髪屋に行くと熱い蒸しタオルを絞って顔の下半分にかけてくれる。髭を剃りやすくするためである。あるとき、仰向けになっていると、絞る前のタオルが顔全体にかぶせられた。「熱いやないか！」と文句を言うと、散髪屋のおっちゃんが即座に「ワシかて熱いやないか！」と言ったというもの。……この話が条件反射のように連想が働くから、散髪屋も笑いをこらえるのに苦労するから嫌い。